

論文

## 第二言語としての日本語使用者<sup>1</sup>同士のカテゴリー化実践 —第三者言語接触場面の対称的なやりとりに注目して—

Categorizing Practice between L2 Users in Japanese Conversations:  
Focusing on Symmetrical Interaction in Third-Party Language Contact Situations

赤羽 優子 (Yuko AKAHANE)  
筑波大学人文社会科学部 博士後期課程

本稿は、第二言語としての日本語使用者同士の日本語会話における対称的なやりとりに焦点を当て、参加者が自分や相手をどのように捉え、どのようにやりとりを継続しているかを論じる。対称的なやりとりとは、参加者同士が自発的な意見や情報の述べ合いを双方向的に行う発話連鎖を指し、母語話者と非母語話者の会話において目指されるやりとりでもある。分析データは、日頃から第二言語としての日本語で会話をする友人同士のペア、13組の約13時間に渡る日常会話資料である。会話データから対称的なやりとりを抽出し、参加者がどのようなカテゴリーに属して発話し、どのように相互行為が続いていくのかを、成員カテゴリー化分析 (Sacks 1972) によって分析した。その結果、発話連鎖の中で基盤化された理解を元に、①参加者同士が同じカテゴリーにカテゴリー化される、②参加者同士がそれぞれ異なるカテゴリーにカテゴリー化される、③「韓国人」「中国人」などの「出身国人」カテゴリー対と『外国人』カテゴリー集合が現れることによって、対称的なやりとりが継続していることが明らかになった。これらの結果から、日本語教育現場において問題になる母語話者と非母語話者の非対称性を変革するための示唆を得た。

This paper discusses how L2 participants identify with each other and maintain symmetrical interaction in Japanese conversations. Symmetrical interaction means the voluntary contribution in the exchange of information and opinions by both participating parties interactively. It is the desired style of conversation between native speakers and non-native speakers. About 13 hours of ordinary conversations in Japanese by L2 users comprised of 13 friend pairs were analyzed using Membership Categorization Analysis (Sacks 1972). The goal is to identify the membership categories exhibit among the interactions between the participants and how the conversations and interactions are maintained. The different categories in participants' symmetrical interactions and membership categorization devices were identified. The results show the following three membership categories tend to appear in symmetrical interactions between the participants: (1) a common identity between the participants (i.e. both are international students, both live in the school dormitory, or both share a similar experience); (2) opposite identity category between the participants (i.e. differences in how they perceive certain topics, differences in their background, or likings); (3) ethnic/national identity category and/or a broader category collection of "foreigners/non-Japanese." It becomes clear that these membership categories help to maintain the symmetrical interactions as we analyze the basis of the sequence. The results suggest possible reforms to asymmetrical conversations between native speakers and non-native speakers in Japanese language learning settings.

キーワード：第二言語使用者 第三者言語接触場面 対称的なやりとり 成員カテゴリー化分析 アイデンティティ・カテゴリー

**Keywords:** L2 Users, Third-Party Language Contact Situation, Symmetrical Interaction, Membership Categorization Analysis, Identity Category

<sup>1</sup> 本研究は、やりとりに関わる当事者の視点を重視するため、所与の前提として、「標準」である母語話者に対し「逸脱」と捉えられる傾向の強い「非母語話者」を用いることを避け、「第二言語使用者 (Cook 1999)」を用いることにする。

## 1. 研究背景

人の国際的移動が活発化した現代では、文化的・言語的背景が異なる人々同士の接触場面 (Neustpný 1985) が日常化してきている。Fan (1992) は、接触言語を基準に接触場面を分類し、会話の参加者一方が母語を用い、一方は非母語を用いる従来の接触場面を「相手言語接触場面 (partner language contact situation)」とし、参加者のいずれもが母語ではない第三者の言語を用いる場面を「第三者言語接触場面 (third-party language contact situation)」とした。グローバル化に伴い、英語は国際語 (Smith 1976) として、貿易、観光、国際会議などで世界的に使用されている。英語を第一言語とする人々の数は約4億人と言われているが、第二言語や外国語として使用する人々の数は約17億人に及ぶと言われ、現代社会における英語使用場面の多くは、第三者言語接触場面になっている。

一方日本語は、母語話者が約1.3億人、学習者が約399万人 (国際交流基金 2012) であり、話者のほとんどが日本在住者である。よって、国際的な場面でさまざまな背景を持つ人々の間で用いられる英語とは違い、日本語の第三者言語接触場面が見られるのはほぼ日本国内となり<sup>2</sup>、母語話者がマジョリティとなる環境において、マイノリティの間で日本語が用いられる場面と言える。日本国内に居住する外国人登録者数は、2015年12月に223万2,189人となり、過去最多になった (法務省 2015)。特に、留学のために日本に滞在する外国人が約24万7000人と、前年比で3万人以上増加している。短期滞在者や永住者などと異なり、留学生は教育機関において日本語学習または日本語で勉強することが前提となり<sup>3</sup>、背景の異なる人と同時に付き合うことが多く、一定の日本語能力を持っている人が多いため、日本語がお互いの共通語になるという (ファン 2011)<sup>4</sup>。そして日本語教育場面における学習者同士、地域の外国人ネットワークにおける活動やアルバイトなど (ファン 1999) で日本語のやりとりが生まれ、近年では、災害時の外国人同士の情報のやりとりが重要になっているとの報告 (マイヤール・横山 2005) もある。このように、日本国内の多言語化・多文化化が進展する中で顕在化した第三者言語接触場面は、今後さらにその重要性を増すものと予想される。

## 2. 先行研究と目的

### (1) 第三者言語接触場面研究

日本語の第三者言語接触場面に関する研究は、主に言語管理理論<sup>5</sup> (Neustpný 1985、ネウストプニー 1995) の観点から分析が行われている。ファン (1999) は、第三者言語接触場面では母語話者が不在のため、1) 「標準日本語」にこだわらず自らの「中間言語」を規範としている、2) 参加者同士に言語ホスト・ゲスト<sup>6</sup>両方のストラテジーの使用が観察され、ホスト・ゲスト関係が成立しない、

<sup>2</sup> 近年、海外における日本語教育で、インターネットを使用した遠隔交流 (労・岩崎・斎藤・松浦 2013) なども試みられるようになってきたが、未だ数は少ない。

<sup>3</sup> 「留学生30万人計画」の策定によって進められたグローバル30 (「国際化拠点整備事業 (大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業)」) のように、英語による授業のみで学位が取得できるコースも設置されてきているが、日本語・日本文化に関する学習の機会やインターンシッププログラムによる日本企業での就業体験の場の提供などにも力が入れられており、日本語学習も重視されている。

<sup>4</sup> 英語力が高い欧米系留学生間では、英語が共通語になるとも考えられるが、日本の場合、留学生の9割以上はアジア地域出身であり、英語を第二言語として学んできているとは限らないため、日本語がキャンパスの共通語となる場面は珍しくない。独立行政法人日本学生支援機構によると、2015年5月1日現在の日本国内の留学生数は208,379人、そのうちアジア地域からの留学生が92.7%を占めている。

<sup>5</sup> インターアクション・プロセスの分析のためにネウストプニーによって提唱された理論。「言語管理」は何らかの問題を解決するものであり、「言語問題 (language problems)」は規範 (norms) からの逸脱によって生じ、留意、評価、調整というプロセスを辿るとしている。

<sup>6</sup> 言語管理理論の観点から見た接触場面においては、母語話者＝言語ホスト、非母語話者＝言語ゲストとされ、言語ホストは会話維持のために、自分の会話参加を増やしたり控えたりすることで相手の参加を求めたり助けたりする調整をし、言語ゲストは自分の会話参加を少なくしたり挑戦したりするために、言語ホストに助けを求めたり任せたりする調整をするとされている (ファン 1998)。

3) 参加者はすべての逸脱を解決しようとせず、会話維持の方を優先するという特徴を明らかにしている。また春口 (2004) は、言語レベルが上級と中級の学習者同士と、母語話者と中級学習者の初対面会話を比較し、上級学習者には言語ホストに準じた行動が見られ、中級学習者にもホスト・ストラテジーの使用が観察されたことから、第三者言語接触場面における言語的役割は、言語能力の上下によって支配されるわけではないとした。言語管理理論の観点からではないが、岩田 (2006) は留学生同士の自由会話におけるイニシアチブの形成とトピック展開に注目し、イニシアチブレスポンス分析<sup>7</sup>を行った。そしてターン配分のパターンの組み合わせから、全体的に会話参加が対称になると結論づけている。これらの研究から、第三者言語接触場面では参加者間の関係が固定されないことによる「会話参加の対称性」がキーワードになると考えられる。

## (2) 会話参加の対称性

会話参加の対称性や非対称性に注目した研究は、主に言語行動と相互行為の観点から行われている。言語行動の観点からの研究は、相手言語接触場面を対象に、発話量や質問、導入した話題、トピックの導入回数、割り込みや参加を調整するストラテジーの頻度などを指標として量的分析がされてきた。そして参加者間の言語能力の違いから、一方が会話の方向付けをコントロールするために、会話参加が非対称になると結論づけられてきた (Beebe & Giles 1984, Fan 1992など)。Fan (1992) は、日本語母語話者と中国語母語話者による日本語と英語の相手言語接触場面と第三者言語接触場面を対象に、発話量や修正行動の頻度を数量化し、会話参加の特徴を分析した。そして母語話者が会話の破綻を防ぎ、会話維持の仕事をより多く負担することを指して「会話参加が非対称的」と述べている。

相互行為の観点からの研究は、会話参加の非対称性とは対話の本質であり、対話の局所的 (local) レベルから全体的 (global) レベルまでに偏在する不等価性 (inequivalences) であるという Linell & Luckmann (1991) の考え方を元に行われている。局所的レベルでは、話し手-聞き手としての発話や、質問-応答、依頼-承諾など、発話連鎖のパターンとしての非対称が現れるとされ、西條 (2005) は、相手言語接触場面と母語場面を対象に、話題開始・終了発話の局所的・全体的関係と言語形式を比較した。そして相手言語接触場面では、先行発話への応答と反復によって前後の一貫性を保ちつつ、文末叙述、提題、応答によって話題導入を交渉し、短い発話によって会話の進行と理解を管理して、お互いの非対称性を克服することを明らかにした。一方、全体的レベルの非対称性は、より長い談話やトピック等、大きい連鎖に見られるパターンの性質を指す。岩田 (2005) は、相手言語接触場面を対象にイニシアチブレスポンス分析を行い、その結果、母語話者の質問と非母語話者の応答という一方向的で非対称的だったやりとりが、お互いが自発的に意見や情報を述べ合う、双方向的で対称的なやりとりへ変化し、両者が協力して会話維持に当たったと報告している。

以上の研究から、会話参加が対称的であるか非対称的であるかは、分析の視点によって異なる (Marková & Foppa 1991) ことがわかる。言語行動に関する分析では、属性を前提とした量的分析から、母語話者が会話の主導的役割を果たすがゆえの非対称性が論じられ、相互行為に関する分析では、参加者の持つ所与の条件ではなく、動的变化に注目して会話を質的に分析することで、発話の連なりの中で非対称性/対称性が形作られていることが明らかにされた。両者に共通する点は、非対称性は何らかの形で会話に必ず存在するという点、そして相手言語接触場面の会話で研究者達が重要視し、目指されているのは、何らかの偏りが解消された状態として対称性が作られ、会話が維持されることだと思われる。ところが非対称性を問題視し、それに着目するためか、対称性とは何かが明示されていない研究が多い。唯一岩田 (2005) は、お互いが自発的に意見や情報を述べる連鎖を「バランスのとれたターン」すなわち「対称的なやりとり」とし、当該の会話がバランスのとれたターンで終始すれば、「会話参加が対称的」または「会話参加における全体的様相に対称性が構築された」としている。しかし、ここで疑問に思うのは、「全体」の範囲をどう決めるのかということである。分析対象と

<sup>7</sup> Linell, Gustavsson & Juvonen (1988) による分析方法。発話の連鎖に焦点を当て、「ターン」分析単位としてコード化し、各ターンのイニシアチブの性質とレスポンス的性質に注目して分析を行う。

なった会話の様相が対称的になったとしても、その前後にさらに会話が続けば、それは局所的な特徴になるだろうし、本来は会話が続くにも関わらず、研究者が決めた時間設定によって会話が終了している可能性もある。よって「全体的様相としての対称性」としても、それはあくまで局所的なレベルでの「対称的なやりとり」が、当該データの多くを占めるかどうかという話であり、分析から把握できるのは、局所的なレベルでの「対称的なやりとり」までで、注目すべきはそれがどのように継続しているかではないだろうか。岩田(2005)は、会話の中で非対称的なやりとりが対称的なものに変化するきっかけを分析し、アイデンティティ・カテゴリーの変化が関わっていることを明らかにしている。杉原(2006)も、相互行為上の非対称性が特定のカテゴリー化実践と結びついていることに注目し、参加者のふるまいとカテゴリーへの志向を記述しており、対称的なやりとりを考察するためには、カテゴリーを分析することが必要と考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、意見や情報を双方が偏りなく自発的に提示し合う連鎖を「対称的なやりとり」と定義する。そして、参加者個々の単発的な言語行動を量的に分析するのではなく、参加者のどのような行為とどのようなカテゴリー化が対称的なやりとりの維持、つまり連鎖の継続に関わっているかを質的分析から明らかにし、非対称性が問題になる、相手言語接触場面の日本語会話に対する示唆を得ることを目的とする。

### 3. 研究課題と研究の意義

日常会話では、適切なタイミングで、適切な立場から、適切な発言をすることが必要となり、自発的に会話に参加する動機が生まれる。そして、適切なタイミングで適切な発言が続くことで会話が維持され、何らかの相互行為が達成される。参加者は適切な立場の「何者か」として相互行為に関わり、その意識は会話の中に現れる。この「何者として」という意識、つまりある集団の中の相互行為に現れる成員のアイデンティティ・カテゴリーを、Sacks(1972a, 1972b, 1995)は「成員カテゴリー」とし、「成員カテゴリー化装置(membership categorization device)」という概念を提示した。この概念を用いて相手言語接触場面を分析した研究に、西阪(1997)、河野(1999)、杉原(2003)がある。

西阪(1997)は、留学生へのラジオインタビュー会話を分析し、「日本人」と「外国人」というカテゴリーが自明ではないことを明らかにした。インタビュアーが、日本についての詳しい知識を持つ留学生と話している場合、この人物は「外国人」というよりも「専門家」として認知される。つまり2人の間には、「日本人-外国人」ではなく、「素人-専門家」という成員カテゴリーが現れる。また、「日本人であること」は日本人らしいふるまいについての知識と結びついており、インタビュアーが「日本人であること」、留学生が「外国人であること」、そして相手と自分が「異なる文化に属している」ことは、予め決まっていることではなく、全て相互行為の中で、参与者達が協同でその都度成し遂げているとしている。つまり成員カテゴリーは、所与のものでも固定されたものではなく、動的で変化しうるものであり、当事者自身が決めるものである。

河野(1999)は、日本事情の授業における日本語ボランティア活動の会話を分析し、コミュニケーションは「〇〇人」「××人」と想定してから始まるのではなく、参加者間の協同作業によっては、変わり得るものであるとした。そして異文化間コミュニケーションにおいては、「〇〇人、××人」という異文化性ではなく、多様性に目を向けるべきであると主張した。相手言語接触場面の言語行動に注目した研究は、「〇〇人」という背景を要因として、第二言語使用者の異文化的特徴を論じる傾向がある。しかし以上2つの研究は、「〇〇人」という背景は前提ではなく、会話参加者本人達が相互行為の中でその都度位置付け合う特徴であることを明示している。これは、第三者言語接触場面という異文化性が注目されがちな場面について、質的分析を行う本研究において非常に重要な視点となる。

杉原(2003)は、日本国籍住民と外国籍住民による「多文化間対話活動<sup>8</sup>」を分析し、相互行為の中

<sup>8</sup> 「多文化間対話活動」とは、「多文化共生の観点から、日本籍住民と外国籍住民が対等な立場で参加し対話を通じて問題意識を共有していくという活動(杉原 2003:1)」を指す。

で主に「日本人／外国人」という二項対立的なカテゴリー対と、『家族』『性別』というカテゴリー集合が現れ、維持される様子を記述した。そして「○○人」カテゴリーは、「日本人／外国人」カテゴリー対の下位分類として現れ、それらのカテゴリーの出現は、質問がきっかけとなっていたとしている。また「日本人／外国人」カテゴリー対を形成・維持する一因は、「○○（国）ではどうですか」といった「国籍カテゴリー有標質問」であり、反対に「△△さんはどうですか」といった「カテゴリー無標質問」が、多様なカテゴリーの出現につながっていたと述べている。杉原の研究は、成員カテゴリーのみでなく、カテゴリーが現れるきっかけにどのような行為が関与しているかを明らかにした点で意義があり、対称的なやりとりの維持に関わる行為を分析する上で参考になる。

以上の研究結果を総じて見ると、相手言語接触場面では「日本人」「外国人」といった「○○人」カテゴリーが、相互行為の中で対立的に現れることが特徴であると言えるだろう。それでは、本研究が対象とする第三者言語接触場面の、参加者双方から自発的に意見や情報が提示され合う対称的なやりとりでは、どのような成員カテゴリーが現れ、どのような行為とカテゴリー化によって連鎖が継続するのだろうか。また、「○○人」カテゴリーは現れるのだろうか。これらの問いに答えるため、以下を研究課題とする。

【課題①】 第三者言語接触場面における対称的なやりとりでは、どのような成員カテゴリーが現れるのか。また、どのような行為とカテゴリー化によって、対称的なやりとりが継続するのか。

【課題②】 第三者言語接触場面における対称的なやりとりにも、「○○人」という成員カテゴリーは現れるのか。現れる場合、どのような行為とカテゴリー化によって、対称的なやりとりが継続するのか。

本研究の意義は次の2点である。第一に、第三者言語接触場面という新しいコミュニケーション場面に焦点を当てることで、今後ますます多様化するコミュニケーション場面の到来に備えた考察を行うことができる。第二に、対称的なやりとりを質的分析によって記述することで、相手言語接触場面で目指されるやりとりを可視化し、提示することができる。本研究は、接触場面の多様化を背景に現れたやりとりを、社会的視点に基づいて記述する試みである。

## 4. 研究方法

### (1) 分析方法

先行研究を参考に、成員カテゴリー化に関する概念を会話分析に応用し、分析手法として提唱された「成員カテゴリー化分析 (membership categorization analysis)」(Lepper 2000, Stokoe 2012他)を分析に用いる。前述したように「成員カテゴリー」とは、ある集団の中の相互行為に現れる成員のアイデンティティ・カテゴリーのことである。人は誰でも、「女性」「教師」「母親」など、いくつものアイデンティティ (成員カテゴリー) を持っている。会話参加者自身が、その内のどの成員カテゴリーに志向するかを決め、相互行為内でその志向が表明されることで、その成員カテゴリーが相互行為に関連することがわかる (Schegloff 1992)。それぞれの成員カテゴリーは、個別の事象として存在するだけでなく、他の成員カテゴリーや成員が行う活動とともに組織化される。例えば、「父親」「母親」「子供」という成員カテゴリーは、「家族」という「カテゴリー化装置 (membership categorization device)」に属している。そして、ある成員カテゴリーが他の成員カテゴリーとともにグループを形成するとき、これは「成員カテゴリー集合」と呼ばれる。また「妻－夫」「大人－子供」「被害者－加害者」というように、対となるカテゴリーは「カテゴリー対」と呼ばれる。そして「妻－夫」のように、特に各成員カテゴリー間にある種の権利・義務などが伴うことを、慣習的な知識として前提することが可能な成員カテゴリーの関係は、「標準化された関係対 (standardized relational pair)」と呼ばれる。さらに「赤ちゃん」という成員カテゴリーに「泣く」という活動が結び付くように、特定のカテゴリーに結び付くような活動は「カテゴリーに結びつく活動 (category-bound activities)」と呼ばれる。これは、カテゴリー化された個人によって、行われることや関わり方が社会的に予測あるいは期待をされる活動 (Jayyusi 1984) を指す。カテゴリー化装置の使用には、次の2つの規則がある。

1つは、ある個人は自分が属することができるカテゴリーを複数持っているが、個人に適用されるカテゴリーは、発話の度にその内1つで十分であるという「経済規則 (economy rule)」である。もう1つは、ある個人にあるカテゴリーが適用されると、その次に言及される他の個人も当該のカテゴリー化装置に属するカテゴリーが適用され得るという「一貫性規則 (consistency rule)」である。このようなカテゴリー化に関する知識を持ち、人は無意識の内に、自分を含めた個人をあるカテゴリーに属すると見なしている (杉原 2003)。

Schegloff (2007b) は、成員カテゴリー化分析がしばしば連鎖組織の分析を元にせず、当事者の行為ではなく、研究者自身の推測や信念に基づいて行われていると批判した。そして、トークの中にはカテゴリーとして適用されるさまざまな属性や人物への言及、説明があり、その規範的な結びつきは、Sacksが示したような証明が必要であると分析の改善を求めている。これを踏まえ Bushnell (2014) は、会話分析で明らかにされてきたシステムや概念を用いて、カテゴリーの生成を裏付ける連鎖的なカテゴリー化分析の方法を議論している。例えば、質問-応答連鎖の中で明確にカテゴリーが述べられることや、明示されずとも権利や義務、属性が相互行為の中でカテゴリーとして扱われていること、比喩の使用や、非難や要請などの行為を通してカテゴリーが形成されることの記述によって、カテゴリーの出現を説明できるとしている。そして、優先的な応答 (Bilmes 1993) や、隣接ペアのような条件的関連性 (conditional relevance) (Schegloff 1972)、遡及的連鎖 (retro-sequence) (Schegloff 2007a) などの連鎖分析のツールを用いた説明方法を提案している。よってカテゴリー化分析では、相互行為データを微視的に観察し、発話連鎖とカテゴリー化の関係を詳細に記述することが重要となる。

以上を踏まえ、本研究は会話分析の手法を用い、第三者言語接触場面の日本語会話から、意見や情報が参加者双方から提示され合う発話連鎖を抽出する。それを対称的なやりとりとし、連鎖の中で参加者が何者として相互行為を行い、どのように発話の連鎖を継続しているのかを記述する。

## (2) 研究対象

研究対象は、第二言語としての日本語使用者のペア13組、合計約13時間の日本語会話である。全ての会話は、調査協力者当人が日頃から日本語で話す友人同士の2者間日常会話である。収録時間はそれぞれ45分から80分に渡る。録画及び録音は、2013年6月から8月にかけて行われた。会話収録場所は、食堂やカフェ、図書館、レストラン、大学構内などさまざまであった。本稿の著者は調査協力者が話す場に赴き、機材を準備し、分析データとする2名で話している会話には立ち合わずに録音・録画を行った。調査協力者は関東圏内の大学に在籍し、滞日期間が2年から6年、日本語会話能力が中上級以上であると自己申告した20代から30代の留学生である。出身は、中国8名、韓国6名、タイ3名、台湾2名、ケニア2名、インド1名、モンゴル1名、マレーシア1名、ラオス1名、ロシア1名であった。収録資料は、好井・山田・西阪(1999)を参考に文字データ化された。文字化に用いた記号は論文末尾に記す。

## 5. 結果と考察① 対称的なやりとりに現れるカテゴリー

課題①について、参加者双方から意見や情報が表明し合われる連鎖を、会話分析によってデータから抽出し、成員カテゴリー化分析によって、参加者がどのようなカテゴリーに属する者として発話しているのか、相互行為の中にどのようなカテゴリー化装置が現れるのかという観点から分析した。その結果、「留学生」「寮生」などの「同じ身分」や、「○○をしている人」「××をしたことがある人」のように「同じことの経験者」というカテゴリーが現れ、両者が同じカテゴリーに属する者としてカテゴリー化される様子が観察された。岩田(2005)は、相手言語接触場面の発話連鎖の中で、両参加者に共通するカテゴリーの出現に伴って、対称的な会話参加が見られたと報告しており、それと同じ様子が本研究のデータにも確認された。しかし分析を続けていくと、両者が異なるカテゴリーに属する者としてカテゴリー化されても、対称的なやりとりが継続する様子が見られた。従って第三者言語接触場面では、参加者が属するカテゴリーが両者に共通するものでも、対立するものでも、対称的な

やりとりが継続するという結果が得られた。以下で事例を挙げながら、分析を具体的に説明する。

(1) 対称的なやりとりに現れるカテゴリ①同じカテゴリ「同じ身分」

まず「同じ身分」として、両会話参加者がカテゴリ化される事例を見ていく。会話例1では、本研究における対称的なやりとり、すなわち「自発的に意見や評価が述べられる連鎖」は、15行目から始まる。しかしデータを分析する中で、対称的なやりとりがどのように継続していくかを説明するためには、その前に何が行われているかを記述する必要があると思われた。そこで、対称的なやりとりの前の連鎖から見ていくことにする。

〈会話例1〉 K-M「寮生」

- 01 K: 毎日暑くて(.)え::と宿舎は, エアコンありますか? =  
02 M: =追越.  
03 K: うん.  
04 (0.2)  
05 K: 宿舎. =  
06 M: =とても:暑い.  
07 K: エアコンが付いていますか? エアコン.  
08 M: ああ::あれ(.)今ありま[せん.  
09 K: [ない(.)僕もないんだ.  
10 M: どこ?  
11 (0.2)  
12 M: 平[砂?  
13 K: [平砂h.  
14 (0.3)  
15 M: あ::, 狭い:部屋.  
16 K: そうだよね.  
17 M: うん, うんh.  
18 K: 狭くて暑い.  
19 M: え::来年から,[わたしは:: (0.4) ひっこ引っ越します, 引っ越したいです.  
20 K: [ああ. h.  
21 K: 僕も. =  
22 M: =たぶん(.)一の矢.  
23 K: あ(.)一の矢いいんだよ[ね.  
24 M: [うんうん.  
25 (0.4)  
26 M: 一の矢は::方がいいですね.

会話例1は、タイ出身のKとケニア出身のMが、カフェでコーヒーを飲みながら話をしている。このやりとりは質問-応答連鎖から始まる。まず01行目でKがMの宿舎にエアコンがあるかどうか尋ねるが、02行目でMは「追越」と宿舎の名前を発話する。MはKの質問を、エアコンについての質問ではなく、宿舎の場所を尋ねる質問として理解し、それに対する返答として、具体的な宿舎名を返答したと考えられる。地名や位置ではなく、宿舎の名称を答えたということは、MはKが宿舎名を認識できるくらい、宿舎のことを割とよく知っている人として捉えていると言える。03行目ではKがあいづちをうつが、0.2秒の間をおいて05行目で「宿舎」と、01行目の質問の開始部分を繰り返す。Kはあいづちと沈黙で、ターンをとるのは自分の質問に対して適切な回答をすべきMだという理解を示していると考えられる。しかしMからの回答がなかったため、Kは自分でターンをとって、Mを「回答者」、

自分を「質問者」としてカテゴリー化していると思われる。Kの「宿舎」という発話の後、Mは即座に「とても暑い」と宿舎についての評価を発話するが、これもKの期待した回答ではなく、07行目でKは「エアコンが付いていますか? エアコン」と01行目の質問を言い換える。この発話は、01行目の質問をMが理解していなかった問題源と理解し、質問のキーワードとなる名詞「エアコン」を繰り返し、「ありますか」を「付いていますか」にすることで、修復 (Schegloff et al. 1977) を試みていると思われる。これを受け08行目でMが「あーあれ、今ありません」と応答すると、09行目でKは発話を重ね「ありません」を「ない」に言い換えてMの発話を承認する。ここで08行目までの質問—応答連鎖が達成されたことがわかる。また08行目と09行目の発話は、共にその前に提示 (preposition) された発話に対する受理 (acceptance) として、聞き手が十分に理解したことが示されており、基盤化 (grounding)<sup>9</sup>(Clark 1996) がされたと考えられる。なぜなら08行目は、隣接ペア (Schegloff & Sacks 1973) の第一部分となる01行目をやり直した07行目の質問に対して、聞き手が第二部分となる応答を返し、09行目はその応答の言い換えによって、話し手が意味したことに対する聞き手の十分な理解が観察可能になっており、「Mが住む宿舎の部屋にはエアコンがない」ことが、K、M双方に了解されたことがわかるからだ。さらに09行目でKは「僕もないんだ」と続け、自分の部屋にもエアコンがないと付け加える。これを聞いたMは10行目で「どこ?」とKの住む場所を尋ね、間を置いて12行目では「平砂?」と宿舎の名称を挙げて質問している。このように地名やアパートなど建物の種類ではなく宿舎の名称を用い、そこに住んでいるかいないかを「はい」か「いいえ」でも回答できる肯否疑問文の形で質問したということは、Mは09行目のKの発話を「僕もエアコンを持っていない」だけではなく、「僕も宿舎に住んでいて、その部屋にはエアコンがない」と理解し、Kを宿舎についてよく知っているだけでなく、宿舎に住んでいる人と捉えていると思われる。12行目の発話と重なりながら、13行目でKは肯否疑問文の質問に対する「はい」という回答ではなく、「平砂」と発話している。つまり平砂という宿舎の住人として、宿舎の名前を用いて回答している。この質問—応答連鎖から、KはMと自分自身によって、「寮生」としてカテゴリー化されていると言える。

14行目の沈黙を挟み、15行目でMは「あー狭い部屋」と、Kが住んでいる宿舎の部屋に対する評価を述べる。この直後、16行目でKは「そうだね」とMの評価に同意を表明しており、ここに評価連鎖 (Pomeranz 1984) が現れる。続く17行目ではMがあいづちを打って、Kの同意に対して同意を示し、18行目ではKが「狭くて暑い」とさらに評価発話をしている。この連鎖からが本研究における「対称的なやりとり」である。では、このような評価連鎖が現れるのはなぜだろうか。15行目に注目すると、Mは13行目で示されたKが住む平砂という宿舎を知っており、そこは狭いという理解を評価発話によって示していると思われる。そして16行目のKの同意と17行目のMのあいづちによって、「狭い」と提示された評価が承認、受理され、お互いの了解として基盤化されたと考えられる。また、Kが18行目で部屋が狭いことを繰り返し、さらに「暑い」と付け加えているのは、基盤化された「Kは平砂という宿舎に住んでおり、その部屋は狭く、エアコンがない」という理解を、まとめて表明しているのではないだろうか。つまり、それまでに基盤化された知識を利用して、評価という行為を達成していると言える。さらに19行目では、Mが来年引っ越す希望があることを発話する。21行目でKも「僕も」と、同様の希望を持っていることを表明し、22行目でMは「たぶん一の矢」と希望する引越し先を述べる。ここまでに出てきた「追越」「平砂」とは異なる「一の矢」という宿舎の名称を用いることができるのは、M、Kが共に大学に属する宿舎に住み、その構成をよく知っている寮生

<sup>9</sup> Clark (1996) は、基盤化を、あることを現在の目的に対して十分な程度、共通基盤の部分として確立することとしている。言い換えると、基盤化とは「話し手が意味したことを、聞き手が現在の目的に照らして十分に理解している」ということを話し手と聞き手がお互いに信じていること (高梨 2015:43) を指す。話し手が聞き手にとって観察可能な何らかの行動を提示し、聞き手もこれを受理したことを合図する何らかの観察可能な応答を示し、それを話し手が受け取ることによって、両者の間で基盤化が行われたと見なされる。そのため、基盤化には積極的な証拠が必要とされ、Clark は証拠として、主張 (うなずきや「はい」「いいえ」など)、前提 (提案を取り上げる、関連する次のターンを開始する)、表示 (理解したことを示す、特定の型の応答)、例示 (言い換えや繰り返し、表情、笑いなど) の4つを挙げている。

同士であるからだと考えられ、M、K両者共「寮生」カテゴリーに属する者とみなすことができる。続く23行目でKは「一の矢いいんだよね」と評価発話をし、24行目でMもそれに同意する。沈黙の後、Mは26行目で「一の矢は一方がいいですね」と23行目のKの発話を言い換えている。この23、24行目で行われているのは、15、16行目と同様、評価連鎖とその承認による基盤化と見られる。ではMによる26行目の言い換えは何だろうか。25行目には0.4秒の沈黙がある。24行目で評価連鎖の隣接ペアの第二部分を発話したMは、次のターンを取らなかった。しかしKもターンをとらなかったために、Mが自発的にターンを取って発話を続けることになった。それが26行目の発話である。その際、直前に基盤化された「引越し先は一の矢がいい」という知識を利用して、「寮生である自分達にとって、今お互いが住んでいる道越や平砂よりも、一の矢の方がいい」と言い換え、「寮生」カテゴリーに属する者としてやりとりを継続したと考えられる。

以上をまとめると、質問-応答連鎖の中でお互いの情報が提示され、その受理を受け取り合うことで、参加者の間で基盤化が行われる。そして基盤化された知識を利用して、それに対する評価を発話し合うことによって対称的なやりとりが作られ、「寮生」という「同じ身分の者」というカテゴリーが現れる。また対称的なやりとりが継続するプロセスでは、両者が「寮生」としてカテゴリー化されたまま評価発話を続け、さらに基盤化が進むことが明らかになった。

## (2) 対称的なやりとりに現れるカテゴリー②同じカテゴリー「〇〇の経験者」

次に、参加者が「〇〇の経験者」としてカテゴリー化される事例を見ていく。この事例も、会話例1と同様、質問-応答連鎖の中で基盤化が進み、その後に対称的なやりとりが現れる。ここでは、対称的なやりとりに焦点を当てて記述を試みる。

### <会話例2> E-F「花火大会」

(E、Fが、同じおいしいたこ焼きを食べた経験があるという話から、Fがそのたこ焼きに比べておいしくないたこやきを食べて、それが去年の夏の隅田川花火大会での経験であるという話をし、さらに隅田川花火大会についてのやりとりが行われた後)

- 01 F: 去年, うん::去年?の::, 9月?  
02 E: うん.  
03 F: 土浦の::=  
04 E: =私も::行っ[た.  
05 F: [行った?  
06 E: うん.  
07 F: う:::↓ん.  
08 E: 主人と一緒に.  
09 F: ああ.  
10 E: hhh.  
11 (1.0)  
12 F: 私友だ(.)ちと.  
13 E: うん.  
14 (1.0)  
15 F: 自転車で.=  
16 E: =私も, 自転車で. hhhhh.  
17 (5.0)  
18 E: その日(0.2)雨, ふ[h降ったでしょう? hh.  
19 F: [ん:::↓::.  
20 F: 雨. hhhh.  
21 (3.0)

- 22 E : でもきれい。  
 23 F : きれい。=  
 24 E : =とてもきれい。

会話例2は、台湾出身のEとケニア出身のFが、レストランで食事をしながら話をしている事例である。括弧内に記したように、この断片の直前に、隅田川花火大会についてのやりとりがされ、その後、Fが去年の9月について話し始める。「去年の9月？」という疑問文の形の発話に対し、02行目でEは「うん」と発話し承認している。Eは「うん」のみで、他には何も発話していない。つまりEは聞き手としてふるまい、Fを話し手として捉えており、ここではE＝「話し手」、F＝「聞き手」としてカテゴリー化されている。03行目でFは「土浦の一」と話し始める。するとすかさずEが「私も一行った」と発話する。ここまでFは「去年の9月土浦の」としか発話していない。それにも関わらず、Fが何かにいったことを前提にして、Eが自分も経験したと発話できるのはなぜだろうか。それは、「私も行った」という発話のみで、これ以前に共通の理解となっている何かにいったことが指示できるからだと考えられる。つまり先行するやりとりの「隅田川花火大会」の話が基盤化しており、「去年の9月」と「土浦」に「花火大会」を結びつけることができたため、Eは「Fが去年の9月土浦の花火大会に行った」「そして自分も行った」という理解を示すことが可能になっている。また、Fの発話の途中「土浦の一」の時点でEが話し始められるのは、EがFと同じ「花火大会に行った」経験をしており、Fが続ける内容への理解を自分が示せると判断したためだろう。つまり、EはFと自らを同時に「去年土浦の花火大会に行った者」としてカテゴリー化して発話していると言える。05行目では、発話を重ねながらFがEに「行った？」と質問し、06行目でEがそれを承認すると、07行目でFは「うーん」と発話する。ここでFもEを花火大会に行った人として理解し、両者が花火大会に行った者として基盤化されたと思われる。これを元に、08行目ではEが「主人と一緒に」と発話し、12行目ではFが「私友達と」、15行目ではFが「自転車で」、16行目ではEが「私も自転車で」と、花火大会の同行者と交通手段についての自分達の情報を述べ合っている。つまり基盤化された知識に結びつけて、「私は土浦の花火大会に【誰と】【何で】行った」という情報をお互いに完成させ、それを承認し合っている。17行目の5秒の沈黙を挟み、18行目でEは「その日雨降ったでしょう？」と発話する。やや長い沈黙の後のため、Eは話題を変えることもできたと思われるが、「その日」と指示して花火大会についてのやりとりを続けることを表明し、さらに「雨降ったでしょう？」と文末を上昇調にして、同じ花火大会に行ったFに、その日の天気の確認を求めている。これに対し20行目でFが「雨」と下降調で発話し笑うことで、花火大会で雨が降ったことを認めると、3秒の間に続き、22行目でEは「でもきれい」と評価発話をする。この発話の中には「何が」きれいかは明示されていないが、これまでの基盤化と接続詞「でも」によって雨天の花火大会と結び付けられ、雨でも花火がきれいであったことが理解可能になる。そして23行目でFも「きれい」と繰り返し、同じ花火大会に行った者同士として、Eの評価に同意を示していると思われる。

まとめると、会話例1と同様会話例2も、基盤化された知識を利用して、それに結びつく情報の提示をし合う対称的なやりとりが作られる。その中には、「同じ花火大会に行った者」という「○○の経験者」というカテゴリーが現れ、そのカテゴリーに属する者同士として両者が結びつけられる。そしてそのカテゴリーを維持しながら、さらに基盤化された知識に関連するお互いの情報と評価を述べ合い、やりとりが続いていく。このように、会話例1と2は、対称的なやりとりの中で両者が同じカテゴリーに属する者としてカテゴリー化され、やりとりが継続する様子が確認された。岩田(2005)は相手言語接触場面では、お互いの共通点を焦点化するトピック展開と自らの積極的なコメントによって、カテゴリーが2人に共有するものになり、対称的なやりとりに変化したと述べている。上述の分析から、お互いの接点を基盤化し、それについての評価や情報を提示し合うことが、対称的なやりとりを継続するプロセスになっていることが確認された。よってリソースとして共通する知識を持ち込み、互いの共通基盤の上でやりとりを行うことは、相手言語接触場面でも第三者言語接触場面でも、対称的なやりとりに必要なプロセスと言える。

### (3) 対称的なやりとりに現れるカテゴリ③対立するカテゴリ

ここまで、対称的なやりとりの中で、会話参加者がお互いに同じカテゴリにカテゴリ化され、やりとりが継続する事例を見てきた。しかし、データを観察する中で、両者が同じカテゴリに属する者としてカテゴリ化されなくても、参加者双方からの意見の述べ合いが続き、対称的なやりとりが継続する事例が見られた。以下で具体的に見ていく。

#### 〈会話例3〉S-T「夏」

- 01 T: 本場の夏,今まだ.  
02 S: 今は夏.  
03 T: ま,まだ真夏:-.  
04 S: ま:だ真夏じゃないかな.  
05 (0.2)  
06 S: 真夏じゃないかな.  
07 S: [[-h 8月.  
08 T: [[今,ちょ,ちょうどいい::hh° なんか.  
09 S: ちょうどいい[じゃないですよ.  
10 T: [ちょうどいいじゃない(.).たぶんマレーシアと(0.3)天気似ている.今こう  
11 [いう感じ.  
12 S: [あだから元気(0.2)-s[元気になりましたね.  
13 T: [hh.  
14 S: [[Tさん前[よりずっと.=  
15 T: [[へっ. [ほんと?  
16 S: =前はずっと::あのなんか(.).眠そうな顔してて.  
17 T: h.わからないねhh.  
18 S: まあ,うん,機嫌が(.).とても::うん.  
19 T: hh[hhh.  
20 S: [良さそうに見えますけど.  
21 T: そうか.=  
22 S: =そう[ですか.  
23 T: [たぶん(.).1週間2週間後また,おちちゃ(0.2)[落ち込むかな.  
24 S: [え::なんでなんで?  
25 T: 暑すぎるからhh[hhhhh.  
26 S: [暑すぎる.  
27 (0.4)  
28 S: あマレーシアもそんなに暑さ:ですか?=  
29 T: =こ,今の暑さ.  
30 S: 同じですか.=[まあわたしもう耐えられないですよ.  
31 T: [大体同じ.  
32 T: もう(0.2)ほんとに暑い:,感じている?  
33 S: うん,わたしじゃた(0.4)うんちょっと耐えられ[ないけど.  
34 T: [うんうんうんうん.  
35 S: と,え:::,なん(.).か,こまめに,あの::水を飲まない,倒れちゃう.  
36 T: あそうかわたし::,まあ小さいからも::,なんかたくさん水を飲んで飲んでお母さんいつも.

会話例3は中国出身のSとマレーシア出身のTが図書館で話している事例である。まず01行目でTが「本場の夏、今まだ」と発話すると、02行目でSは「今は夏」と述べる。03行目でTが01行目の自

分の発話「まだ」を再度発話し、「真夏ー」と語末を少し延ばすように発話すると、そこで途切れてSが「まだ真夏じゃないかな」と「真夏」に続く文を完成させる。さらに0.2秒の間の後06行目では、Sが自分でターンをとり「真夏じゃないかな」と繰り返して、「今は真夏ではなく夏である」という自身の理解を明示する。続く07行目と08行目を見ると、S、T両者が同時に発話を始め、Sは「8月」と発話してターンを終え、Tは「今ちょうどいい」と評価を発話する。この発話は、先行する連鎖で真夏か夏か論じられていた「今」を主題にすることによって、「ちょうどいい」が、論じられていた「夏」に結びつく「暑さ」についての評価に聞こえるよう、組み立てられていると見られる。つまり「今は夏」という理解が、Tの発話にも観察可能になっており、お互いの理解として基盤化していると言える。さて、「ちょうどいい」というTの評価に対し、Sは09行目で「ちょうどいいじゃないですよ」と不同意を表している。評価連鎖では、1つ目の評価となる発話の直後は、同意の方が選好的であり、非選考的な不同意の応答の場合、応答が遅れたり、ためらいなどの間があったり、理由の説明(Antaki 1994)を伴うことが一般的だが、ここではその様子が見られない。非選考的な合図なしで、不同意が発話されているのはなぜだろうか。Sの発話に注目すると、「ちょうどいい」というTの発話を繰り返し、そこに「じゃない」をつけて否定している。「ちょうどいい」の否定形「ちょうどよくない」を用いて、「今の暑さ」についての否定的評価をしているのではない。Tの「今の暑さはちょうどいい」という発話自体を問題として取り上げて修復を開始し、対峙するTの意見との立場の違いを示していると考えられる。ここに「今の暑さが平気な人」であるTと、それを問題視し、「今の暑さが平気ではない人」であるSという対立するカテゴリーが浮かび上がる。10行目でTは、Sの発話と重ねながら「ちょうどいいじゃない」と自分の発話を修復するが、「たぶんマレーシアと天気似ている。今こういう感じ」と付け加える。この発話は、TがSとの意見の違いを理解し、自分を「マレーシア出身者」としてカテゴリー化して、その違いの理由を説明しているように見える。言い換えると、「カテゴリーに結びつく活動 (category-bound activities)」を用いて、一年中暑い国であるマレーシア出身者ならば、このくらいの暑さは当然平気であるという因果関係を示し、意見の違いを正当化する理由を提示していると考えられる。これに対し、12行目でSは「あだから元気になりましたね」と発話する。そして14、16、18、20行目にかけ、以前元気がなかったTの様子と、今のTの様子を描写する。つまりSは、Tが今の暑さが平気な理由説明を受理し、Tの変化を描写することで、マレーシア人であるTの気候の感じ方への理解を示しており、SもTを「マレーシア人」としてカテゴリー化していると言えるだろう。Sによる描写の後、Tは23行目で以前のように自分が再び落ち込む可能性があることを示唆し、「なんで？」というSの質問に対して、25行目で「暑すぎるから」と理由を答えて笑う。これを受け、Sは28行目で「マレーシアもそんなに暑さですか？」と質問する。この質問は、マレーシア人であるTにマレーシアの暑さを問うものになっており、「こ、今の暑さ」という29行目のTの回答も、マレーシアの暑さを知っているマレーシア人としての応答と見られる。続く30行目でSは「同じですか」と発話し、今の日本の暑さとマレーシアの暑さが同じであることへの理解を示している。そしてすぐに「わたしもう耐えられないですよ」と暑さに対する自分の状態を述べる。するとTは32行目で「もうほんとに暑いー、感じている？」と質問する。Sは「うん私じゃた、うんちょっと耐えられないけど」応答し、本当に暑いと感じていることを肯定している。この発話の「私じゃ」に注目したい。「私」や「私は」ではなく、あえて「私じゃ」と発話しているのは、「Tとちがって、私じゃ耐えられない」という立場の対比を示して、暑さに耐えられない理由が「私であるからだ」と示すためだと考えられる。つまり、Tは平気だが自分は無理であるということを、マレーシア人であるTであれば耐えられるが、マレーシア人ではない自分では耐えられないというように、自分を「非マレーシア人」としてカテゴリー化して説明していると見られる。そしてSは35行目で「こまめに水を飲まないで倒れちゃう」と発話し、Tは36行目で「あそうか私ー」と、Sと対比した自分のエピソードを述べ、TとSの対立が維持されたまま、やりとりが続いている。

このように会話例3では、対称的なやりとりの中で、「今の暑さが平気な人／平気ではない人」「マレーシア人／非マレーシア人」といった、一方が「A」もう一方が「非A」となる対立したカテゴリーが現れ、共通基盤を元に両者が評価や情報を発話し合って、やりとりが続く様子が観察された。た

だしこのような連鎖で現れるカテゴリーの関係は、「妻-夫」「大人-子供」のような「標準化された関係対 (standardized relational pair)」ではなく、体質や出身などの個人差から「Aであるかないか」によって生まれる二項対立的な関係であった。会話例1、2は、対称的なやりとりの中で参加者同士が同じカテゴリーに属する者としてカテゴリー化されていたが、会話例3では、同じカテゴリーでなくとも対称的なやりとりは継続していた。岩田(2005)の分析では、相手言語接触場面の発話連鎖において、両者に共通するカテゴリーが現れることが、会話参加が対称的になる要因とされていたが、本研究で収集した第三者言語接触場面の会話では、参加者間に共通するカテゴリーが作られることに限らず、対立するカテゴリーが作られても、情報や意見の述べ合いが志向されることが明らかになった。よって第三者言語接触場面では、対称的なやりとりに関わる参加者達のお互いの位置付けが多様であり、より自由なふるまいによってやりとりが継続できると推察される。

## 6. 結果と考察②「〇〇人」というカテゴリー化

次に課題2に対して、第三者言語接触場面における対称的なやりとりにも、「〇〇人」という成員カテゴリーは現れるのかを分析したところ、会話例3にも現れたように、マレーシア人、中国人、韓国人など「【参加者の出身国】人」という国籍カテゴリー(杉原2003)が見られた。そしてこのカテゴリーがどのように現れるかを分析した結果、国名が含まれる質問や情報提示が、カテゴリー生成のきっかけになっていた。国籍カテゴリーが現れると、参加者の間で「〇〇人/××人」というカテゴリー対が作られることもあるが、お互いを共通する『外国人』というカテゴリー集合で捉え、「日本人」と対立する『外国人』カテゴリーに属する者同士として意見を述べ合い、「〇〇人/××人」カテゴリーが外国人カテゴリー集合の下位分類となっている様子も見られた。以下で、「〇〇人/××人」カテゴリー対と『外国人』カテゴリー集合の現れ方を具体的に説明する。

### (1)「〇〇人」カテゴリーの現れ方

〈会話例4〉U-A「日韓戦」

- 01 U: できのう,サッカーやってただけどテレビで(.)日韓[戦].  
02 A: [ああ::見た見た.  
03 U: 負けた::それも[:. hhhhhh.  
04 A: [ああ:::,ちょっと残念[だったけどね.  
05 U: [うん結構見て(.)見てたのに最後 (0.2)  
06 最後やられちゃ(h)った(h).  
07 A: う:::ん.  
08 U: ロスタイムで.  
09 (2.0)  
10 A: 中国人にとってもすごい残念だったよ.=  
11 U: =なんで?  
12 (0.2)  
13 A: だってその(0.2)ポイン(.)なんポイントというか[その点数がこうたまらんじゃない?  
14 U: [ああ.  
15 U: そうだね,[優勝で[きたかもし[れなかったよね.  
16 A: [もし [そうそう [そう  
17 A: もし日本勝つだったら::,あの,ちゅ(.)中国のチームがたぶん1位からじゅう=  
18 U: =ああ::[:..  
19 A: [落ちちゃうから.  
20 U: そうだね.=  
21 A: =° うん° .

- 22 (2.0)  
 23 A: 1対1でもいいし::2対2でもい(h)い(h)し[hhh hhhhhh hhhhhh  
 24 U: [ああ:::h,なるほどね,  
 25 A: 勝つのはだめなんだ[ね.  
 26 U: [hh.  
 27 U: なんか(.)2点以上差をつけて勝てば[韓国が優勝する.  
 28 A: [そうそうそうそうそうそう.  
 29 A: うんうん[うんうんうん.  
 30 U: [とかって言ってたけど  
 31 (3.0)  
 32 U: なるほどね hhhh.

会話例4はまず、「できのう、サッカーやってたんだけどテレビで、日韓戦」とUが発話する。01行目の終わりと重なりながら、02行目でAも「ああー見た見た」と発話し、昨日日本対韓国のサッカーの試合が行われたことへの理解を示す。03行目でUが「負けたー」と試合結果について発話すると、04行目でAが「ああーちょっと残念だったけどね」と評価を発話し、試合結果についても理解を示す。05行目でUは「うん」と同意を示し、「見てたのに最後、最後やられちゃった」と続けると、03行目のUの提示をAが受理し、さらにそれをUが受理したことが観察可能になり、日韓戦が両者の共通基盤になったことがわかる。03、05行目の「負けた」「最後やられちゃった」という発話から、Uはこの日の日韓戦に負けたチーム、つまり韓国を応援していたことがわかる。スポーツの国際戦においては自国を応援することが一般的である。もし自国以外を応援する場合、その理由や他の国を応援すること自体に言及するはずである。しかしこの発話連鎖にはその様子が見られない。よってUは「韓国人」カテゴリーに属して「韓国は日本に負けた」「韓国は最後日本にやられちゃった」と発話していると考えられる。次に10行目を見ると、Aは「中国人にとってもすごい残念だったよ」と発話し、11行目でUは「なんで?」とその理由を尋ねている。Aの発話は、韓国が日本に負けたのは韓国人のUにとって残念なことだという理解を示し、さらに中国人にとっても残念であったという評価を示している。このことから、AがUを「韓国人」カテゴリーに属する者とした上で、中国人としての評価を表明していると考えられ、Aは自分を「中国人」カテゴリーに属する者としてカテゴリー化していると言える。その発話を受けた直後の11行目のUの質問は、10行目のAの評価を理解した上でその理由を問うものであり、UもAを「中国人」カテゴリーに属する者として位置付けていることがわかる。続く13行目からは、中国と韓国の勝ち点についての情報をお互いに発話し、日韓戦の試合結果が残念である理由についての理解を深めていく。詳しく見ると、13行目のAの「ポイントというか点数がこうたまらんじゃない?」という発話に対して、UはAの発話中にあいづちを打ち、その後で「そうだよね、優勝できたかもしれなかったよね」と、勝ち点によっては中国が優勝する可能性があったという理解を表明する。16行目を見ると、Uの「そうだよね」を聞いた直後、Aは「もし」と話し始めようとするが、Uの「優勝」が聞こえると「そうそう」というあいづちのみを打つ。これは自分が話し手になるのではなく、Uに発話を続けるよう継続子 (continuer) (Schegloff 1982) としてのあいづちを打ち、合図を送っていると見られる。そしてUの発話後の17、19行目で、Aは「もし日本が勝つだったら、中国のチームがたぶん1位から落ちちゃうから」と、16行目で言いかけた「もし」の後に続く発話をし、中国人として日韓戦の結果が残念な理由を完成させている。20、21行目ではUとAがお互いに同意やあいづちで承認を示し、日韓戦の結果に対する評価が基盤化されている。22行目で2秒の間を置いた後、23行目でAは基盤化された知識に関連させ、「1対1でもいいしー2対2でもいいし」と、中国が優勝できた場合の得点結果について発話し笑う。Uは24行目で「ああーなるほどね」と発話して、まずAの発話を受理し、さらに23行目のAの発話が意味する中国が優勝するためには、「同点でもよかった」を「(日本が) 勝つのはだめなんだね」と言い換えている。そして27行目でUは、「なんか2点差以上差をつけて勝てば韓国が優勝する」と、韓国が優勝できた場合の得点結果を述べて

いる。つまり、AとUはお互いに中国チームを応援する中国人と韓国チームを応援する韓国人として、チームの状況を対比させながら情報を述べ合い、対称的なやりとりを続けている。

このように、会話例4では対称的なやりとりの中で「○○人」カテゴリーが現れ、それが維持される様子が観察された。自分や相手を「○○人」としてカテゴリー化し始める発話には、「日韓戦」や「中国人にとって」のように国名が含まれており、国籍カテゴリーが生じるきっかけは国名への言及と考えられる。「○○人」というカテゴリー化の観察を続け、現れるカテゴリー化装置を分析していくと、大きく分けて「○○人/××人」カテゴリー対と、『外国人』カテゴリー集合という2つが見られた。次項から詳しく見ていく。

## (2) 「○○人/××人」カテゴリー対

〈会話例5〉 G-J 「中国と韓国の広さ」

- 01 J: 中国はね::,こ(0.2)[まあ広いから:::時間かかるでしょう?=  
02 G: [広すぎる.  
03 G: =そうそうそ[う::.  
04 J: [韓国は,一番遠い場所でも:::(0.6)3時間ぐらい.=  
05 G: =えっ?  
06 (1.0)  
07 J: じゃあなんか韓国で:::[新幹線::-  
08 G: [J[の, Jの出身地から:::[ソウルに:::(0.2)行[って::.  
09 J: [うん. [て.  
10 (0.2)  
11 G: どのぐらいかかるの?  
12 J: い(.)[2時間?  
13 G: [結構,南の方でしょう?  
14 J: にじ,2時間?  
15 (0.3)  
16 J: [[新幹線がある::,韓国の[新幹線.  
17 G: [[出身- [うんうんうん.  
18 G: 出身地は結構南の[方でしょう?  
19 J: [うんいっちゃん南のほう(0.6)で2時間3時間.  
..... 13行省略 .....  
33 G: 中国の地図は[大体これ[でしょ?((中国の地図を書く))  
34 J: [うん [うんうん.  
35 G: 北京はこの辺.((地図上に北京の位置を書き込む))  
36 J: うん.  
37 G: 前の彼氏(.)元彼氏[の,なんか(.)出身地はこ[の辺.((地図上に元彼の出身地を書き込む))  
38 J: [うん. [うんうん.  
39 G: ここからここ[に来て(0.2)よん時間かかる.((地図上の北京と元彼の出身地を指す))  
40 J: [うんうん.  
41 J: え:::hh[ (0.3)あそっか.  
42 G: [まあ普通車でたぶん新幹線[だったら2時間[ぐらい.  
43 J: [うん [そっか::.  
44 G: 最低2時間ぐらい.  
45 J: うん(.)そっかそっか,韓国は:::(.)こんな感じで:::,こっちは:::北:韓国だから,((朝鮮半島の地図を書く))  
46  
47 G: うんうん.

まず、「〇〇人／××人」カテゴリー対が現れる例を見ていく。01行目でJがGに「中国は広いから時間がかかるでしょう？」と確認要求をすると、02目でGは「広すぎる」と発話を重ね、Jの発話が終わった後に「そうそう」とあいづちを打つ。これらの発話からわかることは、JはGを「中国の広さについてよく知っている者」として扱い、G自身もそれを承認しているということである。なぜなら、「中国の広さ」をGに確認要求するのは、Gはそれを知っているであろうという予想が働くためであり、さらに言えばGがそれを知っているということがJにとって前提となっているからである。そして04行目でJは「韓国が一番遠い場所でも3時間ぐらい」と発話し、中国の広さと韓国の広さについての比較を示している。05行目で「えっ」と驚きを示していることから、Gは韓国の広さについてあまり知らないことがわかる。よってここで「中国の広さについてよく知っている者＝G／韓国の広さについてよく知っている者＝J」というカテゴリー対が現れる。1秒間の沈黙を挟み、07行目からJは「じゃあなんか韓国で一新幹線ー」と話し始めるが、Jの発話の途中から、Gが「Jの出身地からソウルに行ってーどのぐらいかかるの？」と質問をし、Jの発話は途切れる。この質問から、GはJの出身地が、首都ソウルではない別の町であると知っていることがわかる。つまり韓国の広さについてよく知っている者としてJがカテゴリー化されたのは、韓国出身者だからであり、「韓国人」カテゴリーに属する者として位置付けられていると言える。09行目でJは、Gが発話を続けるよう促す継続子としてのあいづちを打ち、自分が話し手としての権利を行使しないことを示す。そして12行目で「2時間」と上昇調で答えるが、13行目でGが「結構南の方でしょう？」とさらに確認要求をしたために、14行目で「2時間」と12行目の応答を繰り返す。15行目では誰もターンをとらなかったため、Jは16行目で自らターンを取って「新幹線があるー、韓国の新幹線」と発話する。この連鎖からもGにとってJの出身地は既知情報であるが、G自身は韓国国内の地理に詳しくないことがわかる。17行目で新幹線に対する理解を「うんうん」と示しながら、18行目で「出身地は結構南の方でしょう？」と再度確認要求していることから、それが観察できる。一方16行目のJの発話に注目すると、「新幹線があるー、韓国の新幹線」と発話して、自分の出身地からソウルまでは、新幹線を移動手段として2時間であることを示している。韓国の新幹線は「韓国高速鉄道」という正式名称が決められおり、一般にはブランド名である「KTX (Korean Train Express)」の呼称が定着している。しかしJは日本の高速鉄道の名称である「新幹線」を用いている。これは、高速鉄道を指示する適切なものとして「新幹線」を選び、そこに「韓国の」と付け加えることで、JとG双方に韓国高速鉄道が理解可能になると判断したからではないだろうか。つまり「エクスプレス」でも「高速鉄道」でもなく「新幹線」が、在日留学生であるJとGにとって、「韓国高速鉄道」を理解するための最適な情報であると考えられる。

続く13行省略部分では、Jが韓国国内での移動について話を続けるのだが、33行目でGは手元の紙に中国の地図を書き出し、中国の話始める。Gの発話と行動を観察すると、33行目の発話をしながら地図を書き、35行目の「この辺」を発話しながら北京の場所をマークする。そして昔の彼氏の出身地も「この辺」を発話しながらマークしており、Gが中国の地理をよく知っていることが見て取れる。39行目の「ここからここに来て、4時間かかる」という発話の「ここ」は、北京と昔の彼氏の出身地を指している。つまり、自分と彼が会うためには4時間かける必要があったことを、お互いの出身地を指し示すことによって説明していると考えられ、Gの出身地が北京であることがわかる。このことから、Gは自分を「中国人」としてカテゴリー化していると言える。さらに42行目で、「まあ普通車でたぶん新幹線だったら2時間ぐらい」と発話し、車で4時間の距離は高速鉄道なら2時間ぐらいだと説明を付け加えている。中国にも高速鉄道があり、「和諧号」の呼び名もあるが、GもJと同様に「新幹線」を用いて「高速鉄道」を示しており、新幹線が両者の共通基盤となっていることがわかる。一方34行目から43行目までJはあいづちを打ち、聞き手としてふるまっているが、45行目で「うん、そっかそっか」とGの発話を受理すると、「韓国はーこんな感じでー」と発話しながら、手元の紙に朝鮮半島の地図を書く。自らを「中国人」カテゴリーに属する者として位置付けているGの発話の直後に、「韓国は」と話し始め、同じように地図を書くことで、Jは中国と韓国を対比的に示していると見られる。そして朝鮮半島の北部を書きながら「こっちはー北韓国だから」と発話する。日本語では

一般的に「北朝鮮」、国際社会では「North Korea」と呼ばれる場所を「北韓国」と表すのは、Jが韓国人としてNorth Koreaを捉えているからだと思われ、Jも自分を「韓国人」カテゴリーに属する者として位置付けていると言える。そして47行目でGは「うんうん」と受理を示し、承認している。

このように会話例5では、Jが「韓国人」、Gが「中国人」として自らをカテゴリー化し、「【国名】は…」で始まる情報提示をし合うことで、「〇〇人／××人」カテゴリー対が維持されながら、対称的なやりとりが続くことが明らかになった。杉原（2003）は「〇〇（国）ではどうですか」といった「国籍カテゴリー有標質問」が、多文化間対話活動において「日本人／外国人」カテゴリー対を形成し維持する一因となったと述べている。本研究で収集した会話では、質問のみでなく国名が含まれる情報提示も、国籍カテゴリーを生じさせるきっかけになっており、これは第三者言語接触場面における対称的なやりとりの特徴と言えるかもしれない。また、お互いが「〇〇人／××人」という異なるカテゴリーに属することから、このカテゴリー対は第4節で見た対立するカテゴリー化の1つと考えられる。

### （3）『外国人』カテゴリー集合

前項の分析から、国籍カテゴリーが現れると、参加者の間で「〇〇人／××人」という対立するカテゴリー化が行われることが明らかになった。ところがデータを分析していく中で、国籍カテゴリーが現れるが、参加者同士が対立する「〇〇人／××人」カテゴリー対ではなく、お互いを『外国人』というカテゴリー集合で捉えている連鎖が観察された。そして「〇〇人／××人」カテゴリーが、『外国人』カテゴリー集合の下位分類となる様子が見られた。以下で事例を挙げ具体的に説明する。

#### 〈会話例6〉L-I「料理」

- 01 L: あの日本の::その中国料理は、  
02 I: うん。  
03 L: 中華料理は(0.2)中国料理ではない° ほんとして°。  
04 (0.3)  
05 L: あの::日本(.)には日本人のために作られた[(0.3)料理です。  
06 I: [う::ん。  
07 L: その味が違います.[h hhh。  
08 I: [ですよね,韓国もそうかも。  
09 L: うんん。  
10 I: キムチって::。  
11 (0.3)  
12 L: あのIさんが::日本で::,料理を作って::  
13 I: うん。  
14 L: その料理は,日本風の,か韓国料理?  
15 I: ううん,韓国風の韓国料理。  
16 L: そうですね。  
17 I: うん.なんか(0.2)日本って甘い,甘いですよ食べ物全[体的に。  
18 L: [あああああああ。  
19 L: そう[そう,そうですね。  
20 I: [だけどわたし甘いものがだめなんですよ。  
.....12行省略.....  
33 L: あのIさん,日本へ来て::(0.4)今まであの日本のこと(0.2)一番,なんといいですかね,不思議?  
34 不思議,不思議と思っている:::ことは何ですか?=  
35 I: [うんうん。  
36 L: =あええ不思議,不思議(.)多分不思議[ではない::あの,あの:::。

- 37 I : [う:::ん。  
 38 I : うんうんうん(.)なんか.=  
 39 L : =中国と i あ::韓国と何か[違う:::とこころ::, 違う:::あその習慣とか, ありますか?  
 40 I : [日本と比べて?  
 41 I : いろいろあるんですけど::.  
 42 L : 一番::強く感じている。  
 43 I : 強く感じてるのは::.(0.2)たとえばダンナの:::, 会社の生活から見ると::.  
 44 L : うん。  
 45 I : なんか韓国って夜遅くまで残業したり, なんか会議が長くすると, 必ずなんか8時?ぐらい

会話例7ではまず、01行目でLが「あの日本の一その料理は」と発話すると、Iは聞き手としてあいづちを打ち、Lは続けて「中華料理は中国料理ではない、ほんとです」と発話する。Lがこのような主張をすることが、連鎖の中で違和感なく聞こえるのはなぜだろうか。それは、Lが中国の中華料理と日本の中華料理を比較し、その違いを指摘できるほど中華料理をよく知っており、さらにこのような主張をする権利が認められた存在であると、IとL双方が理解しているからであろう。では、なぜLには主張をする権利があるのだろうか。続く05行目でLは、日本の中華料理は「日本人のために作られた料理です」と発話し、さらに07行目で「その味が違います」と述べ、両者の違いが日本人の舌に合わせた味にあることを示す。このことから、Lは中国起源の本場の中華料理の味に精通し、さらに日本人の味覚を知っている者であると考えられる。しかし味に精通した者として発話するのなら、「日本の中華料理と中国の中華料理は味が違う」と述べれば十分であり、「日本の中華料理は中国料理ではない」という否定をする必要はないだろう。ここでもう少し後の連鎖を観察してみると、08行目でIは「ですよ」と同意を示し、「韓国もそうかも」と発話している。これは、「韓国の中華調理も日本の中華料理と同様、味が違って本場の中国料理ではない」ではなく「日本の韓国料理も中華料理と同様、本場の韓国料理ではない」と聞こえる。日韓の中華料理についてではなく、日本の中華料理と韓国料理について話すことが適切に聞こえるのは、Iが中華料理をよく知っている者ではなく、韓国料理と日本人の味覚をよく知っている者として発話しているからであり、中国と韓国を対比して日本の料理を議論することが違和感のない存在であるためと考えられる。つまりIはLの発話を、中華料理をよく知る「中国人」としての発話と理解しており、それと同様に、自分は韓国料理をよく知る「韓国人」として発話し、中韓の比較をしていると考えられる。よってこのやりとりでは、LとIの間に「中国人/韓国人」カテゴリー対が現れ、お互いに日本の料理についての評価を示し合っていると見える。12、14行目でLは「あのIさんが一日本で一料理を作って一その料理は日本風の韓国料理?」と質問する。これに対しIは「うん、韓国風の韓国料理」と応答し、韓国人である自分は本場の韓国料理が作れることを示す。Lが「そうですか」と受理すると、Iは17行目で「なんか日本って甘い、甘いですよ食べ物全体に」と評価を発話する。18行目のLの発話では、17行目の「全体的に」に重なって「ああああ」と同意が示され、さらに19行目で「そうそう、そうですよね」と加えられている。このように評価に対して選取的な同意が、重なりから始まって繰り返されていることから、Lが強い同意を表していることがわかる。そして、「韓国人」カテゴリーに属するIと「中国人」カテゴリーに属するLの間で、日本人でない自分達、つまり外国人であるお互いにとって日本料理は甘いという理解が形成され、「韓国人/中国人」カテゴリー対が『外国人』カテゴリー集合へ発展したと考えられる。

続く12行省略部分では、Iがさらに甘辛い味について意見を述べていき、その後33、34行目でLは日本について不思議に思うことをIに質問する。この質問は、L自身によって「不思議」が何度も繰り返されている。36行目では「不思議、不思議、多分不思議ではない一あの一」と、言葉探しをしている様子も見られるが、Iはあいづちで理解を示し、37行目で「なんか」と話し始めている。しかしLは38行目で「中国とあの韓国と何か違う一とこころ一、違う一あその習慣とか、ありますか?」と言い換えている。「中国とあの韓国と」を聞いてすぐにIは「日本と比べて?」とLの質問に向けて聞

き返しており、これはLの言い換えに、33行目では発話されていた「日本」がなくなっていたため、「中国と韓国」の違いについての質問なのか、「日本と中国あるいは日本と韓国」の違いについての質問なのか、自分の理解を確認していると考えられる。この質問に対するLの明確な返答はないが、誤解を問題化したり修正したりするような発話は見られず、41行目でIは「いろいろあるんですけど」と前置きし、日本と韓国の違いを話し出している。つまりLが発話した質問は、日本にきた外国人として、自分の国と違うところや習慣があるかを尋ねるものとして捉えられ、「日本人」に対立する『外国人』カテゴリー集合が維持されている。そして『外国人』カテゴリー集合の下位分類として、I、Lはそれぞれ「韓国人」「中国人」というカテゴリーに属して発話している。言い換えると、それぞれの「【参加者の出身国】人」というカテゴリーが「日本人」に相対するものとして結び付き、同じ『外国人』同士としてまとまっている。そして参加者の中に日本人が不在でも、「日本人」と対になった『外国人』として情報や意見を示し合い、対称的なやりとりが行なわれている。

以上の会話例4、5、6の分析をまとめると、第三者言語接触場面の対称的なやりとりでも、「〇〇人」という国籍カテゴリーが現れることが確認され、このカテゴリーは国名が含まれる質問や情報提示によって生成、維持されていることがわかった。また「〇〇人/××人」という二項対立的なカテゴリー対が作られることもあるが、「〇〇人/××人」が下位分類として統合され、『外国人』カテゴリー集合が生成されることも確認された。これらの結果から、第三者言語接触場面では、自分と相手を対立する者として位置付けたり、対立をまとめてさらに上位のカテゴリーを作ってお互いを同じカテゴリーに属する者同士として結び付けたりと、カテゴリー間の関係を変化させながら、対称的なやりとりを継続していることが明らかになった。

## 7. まとめと今後の課題

本研究は、第三者言語接触場面の日本語会話において、参加者双方から意見や情報が提示し合われる対称的なやりとりを観察し、成員カテゴリー化分析を行ってきた。研究課題は、①どのようなカテゴリーが作られ、対称的なやりとりが継続するのか、②対称的なやりとりの中にも「〇〇人」というカテゴリーは現れるのか、現れる場合どのようにやりとりが継続するのかの2点であった。分析の結果、以下の点が明らかになった。

- (1) 対称的なやりとりの中で形成されていたカテゴリーは、参加者同士に共通するカテゴリーと、対立するカテゴリー対であった。対称的なやりとりは、カテゴリーを維持しながら、発話連鎖の中で基盤化された知識を利用し、それに関連した情報や意見をさらに表明し合うことで継続していた。
- (2) 第三者言語接触場面の対称的なやりとりの中にも、「〇〇人」カテゴリーが現れた。このカテゴリーは、「〇〇（国名）は…?」「〇〇（国名）では…」のように、国名が含まれる質問や情報提示によって生じ、基盤化を進めながら対称的なやりとりが継続していた。
- (3) 国籍カテゴリーが現れると、「〇〇人/××人」カテゴリー対または『外国人』カテゴリー集合が形成される。「〇〇人/××人」カテゴリー対は、対比的にそれぞれの評価や情報を表明し合う連鎖に現れていた。『外国人』カテゴリー集合は、参加者が「〇〇人」「××人」というそれぞれの国の出身者として、「対日本」について意見を述べ合うことによって作られていた。

以上の結果から、第三者言語接触場面における対称的なやりとりは、参加者間でその時々には共有される知識を共通基盤として、それに関わるカテゴリー化が行われ、カテゴリーが維持されたり、カテゴリー間の関係が変化したりしながら、情報や評価、意見が共有され、さらに基盤化が進むことで継続していることがわかった。具体的には、参加者同士に共通する経験や属性、あるいは参加者間で一方が「A」、もう一方が「非A」となるような二項対立的な性質や立場から発話したり、『外国人』カテゴリー集合のように異なる属性が集約されてまとめられ、それと対立する「日本人」のようなカテゴリーについて言及したりすることで、対称的なやりとりは続いていく。従って、参加者間の関係が対立するにせよ、参加者同士がチームのようにまとまるにせよ、情報提示や意見、評価などの自発的な自己表現が行なわれる。赤羽（2014）は、第二言語としての日本語使用者の会話における心理面の調

節<sup>10</sup>を分析し、相手言語接触場面では、相手の様子に注意を払い対立や問題を避けよう意識するが、第三者言語接触場面では、自己表現を積極的に行い、話の内容を深めよう意識することを明らかにしている。これは会話そのものを対象にした研究ではないが、第二言語としての日本語使用者同士は、積極的に自己表現しようとする意識が働くために、対称的なやりとりが行われやすくなっている可能性を示唆している。また岩田(2006)は、日本語の会話教育をデザインする上で、共通基盤構築を志向する会話が、自発的で積極的な会話参加の経験を提供できる可能性を指摘している。本研究の結果を合わせて考えると、共通基盤構築に加えて、共通基盤を元に性質や属性などに関わる相対立する立場構築を志向することも、教育現場の活動において自発的かつ積極的な発話経験の提供を可能にすると考えられるだろう。

杉原(2003)は、相手言語接触場面のディスカッションでは、「日本人」から「○○(国)ではどうですか」という国籍カテゴリー有標質問が投げかけられ、日本人によって話し合いの方向性や枠組みが決められると、「日本人/外国人」カテゴリー対が顕在化し、「外国人」が「日本人」に従属した非対称的な関係性を導くと指摘している。一方第三者言語接触場面では、「○○人/××人」カテゴリー対が現れる場合、会話参加者は各々の国籍に属する者として、お互いに相対立する立場構築を志向する。しかし日本を有標とした質問や情報提示が行われ、「対日本人」が意識されると『外国人』カテゴリー集合が現れ、従属という縦の関係ではなく、対等な横の関係で参加者同士が結び付けられる。そして「日本人」カテゴリーに属さない者同士として、共通基盤構築を志向する対称的なやりとりが継続する。このことから相手言語接触場面でも、それぞれ異なるカテゴリーに属する者同士となった上で、それらのカテゴリーの外側にあるカテゴリーを参加者が認識し、参加者同士が結びつくことができれば、対称的なやりとりが継続できると考えられるのではないだろうか。具体的には、「日本人/中国人」カテゴリー対が、「ヨーロッパ人」を意識することで『アジア人』カテゴリー集合となるやりとりなどが想像される。相手言語接触場面を日本語学習に取り入れた活動では、しばしば参加者間の権力作用と非対称性が問題視され、それを変革する方法が模索されている(杉原 2006、金・野々口 2007)が、第三者言語接触場面の積極的で自発的な発話の姿勢や枠組みを活動に取り入れるような検討も可能ではないだろうか。このように、本稿の知見は、第三者言語接触場面の日本語会話が持つ可能性を、日本語教育場面に援用する提案を行う一助となるだろう。しかしながら本研究では、具体的にどのような相互学習が参加者間で可能になるのか、という分析は行っていない。この点を課題とし、今後は第三者言語接触場面でも可能になる学習を考えていきたい。

#### 付記

本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費(13J01204)の助成を受けたものです。

#### 文字化に用いた記号一覧

- ? 語尾の音が上がっていることを示す。
- . 語尾の音が下がって区切りがついたことを示す。
- , 音が少し下がって弾みがつき、発話途中の区切りのような音調が作られることを示す。
- [ 会話参加者の発話の重なるの始まりを示す。
- [[ 二人の話し手が同時に会話を開始することを示す。
- 直前の言葉が不完全なまま途切れていることを示す。
- = 発話が途切れなく、密着していることを示す。
- ↑ 音調が極端に上がっていることを示す。

<sup>10</sup> 話者同士が対話者に応じて行う意識的配慮(一二三 1995)のこと。「意識的配慮」は「相手への心配り」という「配慮」の狭義の意味を超え、「遠慮」や「気遣い」だけでなく、「積極性」や「率直さ」などを含めた心理面の働きを指す。

- ↓ 音調が極端に下がっていることを示す。  
(.) 0.2秒以下のごく短い間合いで沈黙していることを示す。  
(m.n) 数字の秒数で沈黙していることを示す。  
言葉:: 直前の音が延ばされていることを示す。引き延ばしの相対的な長さをコロンの数で示す。  
言- 言葉が切れていることを示す。  
.h 吸気音を示す。  
h. 呼気音を示す。  
hhh. 笑いを示す。  
° ° 音が小さい当該箇所を° ° で囲んで示す。  
(( )) 注記を(( ))で囲んで示す。

本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費(13J01204)の助成を受けたものです。

## 参考文献

- 赤羽優子 (2014) 「日本語非母語話者の日本語接触場面における心理面の調節—アジア系留学生の相手言語接触場面と第三者言語接触場面を対象に—」『計量国語学』29 (5), pp.131–153.
- 岩田夏穂 (2005) 「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化—非対称的参加から対称的参加へ—」『世界の日本語教育』15, 国際交流基金, pp.135–151.
- 岩田夏穂 (2006) 「日本語非母語話者同士の参加の様相—留学生の自由会話の場合—」『人間文化論叢』9, お茶の水女子大学, pp.175–187.
- 金珍淑・野々口ちとせ (2007) 「共生日本語教室における書加者間の談話分析—非対称な力関係を示す発話行為を中心に—」岡崎眸 (監修) 野々口ちとせ・岩田夏穂・張瑜珊・半原芳子 (編著) 『共生日本語教育学—多言語多文化共生社会のために—』, 雄松堂出版, pp.203–222.
- 河野理恵 (1999) 「『異文化コミュニケーション』としての『日本事情』—エスノメソドロジーからの示唆—」『21世紀の「日本事情」創刊号』, くろしお出版, pp.40–53.
- 国際交流基金 (2012) 「2012年度日本語教育機関調査結果概要抜」, <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey-2012/2012-s-excerpt-j.pdf> (閲覧日:2016年10月23日).
- 西條美紀 (2005) 「接触場面の非対称性を克服する会話管理的方略」『社会言語科学』8 (1), pp.160–188.
- 杉原由美 (2003) 「地域の多文化間活動における参加者のカテゴリー化実践—エスノメソドロジーの視点から—」『世界の日本語教育』13, 国際交流基金, pp.1–18.
- 杉原由美 (2006) 「留学生・日本人大学生相互学習型活動における共生の実現をめざして—相互行為に現れる非対称性と権力作用の観点から—」『WEB版リテラシーズ3』3 (2), くろしお出版, pp.18–27.
- 高梨克也 (2016) 『基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法』, ナカニシヤ出版.
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2015) 「平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果」, <http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl-student-e/2015/---icsFiles/afieldfile/2016/03/14/data15.pdf> (閲覧日:2016年10月23日).
- 西坂仰 (1997) 『相互行為分析という視点』, 金子書房.
- ネウストプニー, J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』, 大修館書店.
- 春口淳一 (2004) 「言語ホストとしての上級学習者の自己調整参加調整ストラテジー—第三者言語接触場面における会話参加の一考察—」『千葉大学日本文化論叢』5, pp.73–86.
- 一二三朋子 (1995) 「母語話者と非母語話者との会話における母語話者の意識的配慮の検討」『教育心理学研究』43, pp.277–288.
- ファン, サウクエン (1998) 「接触場面における言語管理」『日本語総合シラバスの構築と教材開発指

- 針の作成研究会発表原稿・会議録』, 国立国語研究所, pp. 1-16.
- ファン, サウケン (1999) 「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』2 (1), pp. 37-48.
- ファン, サウケン (2011) 「第三者言語接触場面と日本語教育の可能性」『日本語教育』150, 日本語教育学会, pp. 42-55.
- 法務省 (2015) 「国籍・地域別在留資格 (在留目的) 別在留外国人」, 『在留外国人統計 (旧登録外国人統計)』. <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001150236> (閲覧日: 2016年10月23日).
- マイヤール, ロドリグ・横山滋 (2005) 「在住外国人に災害情報はどうか一中越地震被災外国人アンケートから」『放送研究と調査』, NHK 放送文化研究所, pp. 26-34.
- 好井裕明・山田富秋・西阪仰 (編) (1999) 『会話分析への招待』. 世界思想社.
- 労軼琛・岩崎浩与司・齋藤里衣子・松浦恵子 (2013) 「非母語話者同士の学びを支える実践—韓国・中国・スウェーデンをつなぐ遠隔交流の試み—」『2013年 WEB 版日本語教育実践研究フォーラム報告』, pp. 1-10.
- Antaki, C. (1994). *Explaining and Arguing: The Social Organization of Accounts*. Sage Publications.
- Beebe, L. M., & Giles, H. (1984). Speech-accommodation theories: a discussion in terms of second language acquisition, *International Journal of Social Language*, 46, 5-32.
- Bilmes, J. (1993). Ethnomethodology, culture and implicature: Toward an empirical pragmatics. *Pragmatics* 3(4), 387-409.
- Bushnell, C. (2014). On developing a systematic methodology for analyzing categories in talk-in-interaction: Sequential categorization analysis. *Pragmatics*, 24, 735-756.
- Clark, H. H. (1996). *Using Language*. Cambridge University Press.
- Cook, V. (1999). Going beyond the native speaker in language teaching. *TESOL Quarterly*, 33, 185-209.
- Fan, S. K. (1992). Language management in contact situations between Japanese and Chinese, Unpublished Ph.D. Dissertation, Department of Japanese Studies, Monash University, Australia.
- Jayyussi, L. (1984). *Categorization and the Moral Order*. London: Routledge.
- Lepper, G. (2000). *Categories in Text and Talk: A Practical Introduction to Categorization Analysis*, London: SAGE Publications.
- Linell, P., Gustavsson, L., & Juvonen, P. (1988). Interactional dominance in dyadic communication: a presentation of initiative-response analysis, *Linguistics*, 26, 415-442.
- Linell, P., & Luckmann, T. (1991). Asymmetries in dialogue: some conceptual preliminaries, In Marková, I., & Foppa, K. (eds.), *Asymmetries in Dialogue*, 259-273. Harvester Wheatsheaf Barnes & NobleBooks.
- Marková, I., & Foppa, K. (eds.). (1991). *Asymmetries in Dialogue*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf.
- Neustupný, J. V. (1985). Problems in Australian-Japanese contact situations. In Pride, J. B. (ed.), *Cross-cultural encounters: communication and miscommunication*, 44-84. Melbourne: River Seine.
- Pomeranz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred / dispreferred turn shapes. In Atkinson, J. M., & Heritage, J. (eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*, 57-101. Cambridge University Press.
- Sacks, H. (1972a). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In Sudnow, D. (ed.), *Studies in Social Interaction*, 31-34. New York: The Free Press.
- Sacks, H. (1972b). On analyzability of stories by children. In Gamperz, J. J., & Hymes, D. (eds.), *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication*, 325-345. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Sacks, H. (Edited by Jefferson, G. with an introduction by E. Schegloff) (1995). *Lectures on Conversation Vol. I & II*, Oxford: Blackwell.
- Schegloff, E. A. (1972). Notes on a conversational practice: Formulating place. In Sudnow, D. (ed.), *Studies in social interaction*, 75-119. New York: The Free Press.

- Schegloff, E. A. (1982). Discourse as an interactional achievement: Some uses of 'uh huh' and other things that come between sentences. In Tannen, D. (ed.), *Georgetown University Roundtable on Language and Linguistics 1981: Analyzing Discourse: Text and Talk*. 71–93. Georgetown University Press.
- Schegloff, E. A. (1992). Repair after next turn: The last structurally provided defense of intersubjectivity in conversation. *American Journal of Sociology*, 97(5), 1295–1345.
- Schegloff, E. A. (2007a). A tutorial on membership categorization. *Journal of Pragmatics*, 39(3), 462–482.
- Schegloff, E. A. (2007b). Categories in action: Person-reference and membership categorization. *Discourse Studies*, 9, 433–461.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53(2), 361–382. (西阪仰 (訳) (2010) 「会話における修復の組織—自己訂正の優先性」H. サックス他『会話分析基本論集—順番交替の修復の組織』世界思想社, pp. 155–246.)
- Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening up closings, *Semiotica*, 8, 289–327. (北澤裕・西阪仰 (訳) (1995) 「会話はどのように終了されるのか」『日常性の解剖学—知と会話』マルジュ社, pp. 175–241.)
- Smith, L. (1976). English as an international auxiliary language. *RELC Journal*, 7 (2), 38–43.
- Stokoe, E. (2012). Moving forward with membership categorization analysis: Methods for systematic analysis. *Discourse Studies*, 14 (3), 277–303. London: Sage Publications.